

忘却の不在——『ゲルマントのほう』

徳 田 陽 彦

『失われた時を求めて』の中間部の最重要な登場人物というべきアルベルチーナは、プルーストが1913年秋に第一巻の『スワン家のほうへ』を出版した後に、作者のなかでしだいに具体的な姿をとりはじめ、折りしも第一次世界大戦勃発のため作家が後続の巻を出版できない状況のなかで、人物の物語上の役割が鮮明なかたちをとってゆく。主要登場人物が第一巻を上梓してから創造されたという事実は、強調してもし尽くせないものがある。第二巻以後の物語構造を激変させ、中間部が作者が予定していた以上に膨大なものへと変貌させ、物語のさまざまなレベルでの変更・修正を余儀なくさせた。しかし一方でこの“遅れてきたアルベルチーナ”は、13年以前の構想にもとづくプランでは想像もつかないほど豊かでダイナミックな新たな物語構造をもたらした。そのひとつは女性同性愛者群の物語参入である。作者プルーストは、シャルリュス（13年以前ではおもにフレリュスと名づけられていた）を中心とした男性同性愛者の群像を描くことは予定していたが、女性同性愛者はゴモラとさえ名づけられておらず、ソドムの人々と拮抗するほど、つまりソドムとシンメトリックな構造をもつほどには想定されていなかった。

ヴァントゥイユ嬢とその女ともだちが第一巻の『スワン』のモンジュヴァンの家で、父親の写真を冒渇するサディスティックな場面の冒頭に、プルーストが最終段階での校正刷に話者のコメントとして加筆した文章がある。「On verra plus tard que, pour de tout autres raisons, le souvenir ce cette impression devait jouer un jour un rôle important dans ma vie.」⁽¹⁾つまり、この「もつとのちにいけばわかる

⁽¹⁾ Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu, Du côté de chez Swann, tome I*, Bibliothèque de la

が、このときの印象の回想が、まったく別の理由から、私の人生に重要な役割を演じることになるのであった」という予告は、第四卷『ソドムとゴモラ』で、主人公の「私」がアルベルチヌスがふともらした言葉、彼女はヴァントゥイユ嬢の女ともだちと親しい関係だという言葉聞いて驚天動地の心境に陥る場面に通底するのである。この加筆こそがアルベルチヌスが創造されたことをうかがわせる第一歩であろう⁽²⁾。ただしゴモラのなかのゴモラともいうべきヴァントゥイユ嬢の女ともだちとのちにアルベルチヌスが関係づけられることを暗示するこの箇所が、アルベルチヌ誕生を示唆するとはいえ、今日みられるような人物像になるまでにはまだかなりの時間と、作者プルスートの内面の冒険をへる必要があった。アルベルチヌスが、ゴモラの女として主人公を執拗なまでの猜疑心の権化とさせ悩ませる数々の嫉妬の物語は、『ソドムとゴモラ』からはじまり、第五卷『囚われの女』と第六卷『消え去ったアルベルチヌ（逃げる女）』を生むにいたった主たるテーマであるが、これも『スワン』出版以降、発展した産物である。むろん、同性愛や嫉妬だけがアルベルチヌ物語のテーマではない。『消え去ったアルベルチヌ』前半部は、この登場人物が落馬して急死する知らせをうけても、いまなお嫉妬の炎が消えない話者の「私」が彼女の過去の足跡を追い、エメに探偵もどき役目をおわせて、みずからの嫉妬の原因の根拠を探求する。だがその後半部は、「私」の嫉妬のエネルギーがしだいに沈静化へとむかうにしたがって、アルベルチヌにたいする無関心から生じる忘却が時の経過にともにもたげてくる。それは、第一段階、第二段階とすすみ、ついには「ヴェネチア滞在」の章で最終の第三段階にいたり、話者の忘却は完全なものとなり、もうアルベルチヌは無関心の彼方の存在でしかなくなる。嫉妬は心情の生々しい証であるが、忘却は心情の死である。

Pléiade, Gallimard, 10989, p.157. 以下の『失われた時をもとめて』の引用はこの新プレイヤード版による。巻名の略称、巻数、ページ数を記す。

⁽²⁾ Kazuyoshi Yoshikawa, *Études sur la genèse de la Prisonnière d'après des brouillons inédits*, I, p.20, thèse de doctorat, 1976.

われわれがしばらく前から考察してきたのは、この忘却というテーマである。いくつかの先行する拙稿では、第6巻のアルベルチヌの死にまつわる忘却という小説上のテーマにかんして、プルーストが実人生のなかでそれをいかにして発見したか⁽³⁾、また『失われた時』以前の著作では、忘却がどのように形で表現され、それにかんするプルーストの思想がどのようなものであったかを検討してきた⁽⁴⁾。さらには、1912年のタイプ原稿に基づく1914年のいわゆるグラッセ書店の棒組校正刷⁽⁵⁾と現行版を比較することにより、第二巻『花咲く乙女たちのかげに』のなかで、プルーストはいかに既存の物語構造の枠組にこのテーマを組み入れたかを考察した。またグラッセ版に存在しなかった主人公の「私」とジルベルトとの関係を恋愛関係までたかめ、ついにはその恋が破局をむかえて、少年の「私」の内部に、ある意味では人物像の属性を陵駕するばかりの忘却の観念を一小説のリアリズムを無視してでも一どのように移植したかを詳細に論じてきた⁽⁶⁾。今回は第三巻の『ゲルマンのほう』が論及の対象である。

前巻『花咲く乙女』の第一部で、ジルベルトを愛する主人公の「私」は仲違いをしてから、スワン家を訪れても彼女を避け、しだいに会うまいと決心するようになって、「私」の裡に忘却が不規則ながらも進行し、最終的には彼女を忘却の彼方の存在へとおしやる。この部分の主人公の心理とそれを分析する仕方は、小説のリアリズムの見地からすれば—プルーストにとって依拠すべき必須の要素ではない—かなり無理しているとわれわれは考えている。プルースト

⁽³⁾ 「プルーストの忘却論—「心情の間歇」のネガとして」、『教養諸学研究』第104号。

⁽⁴⁾ 「プルーストにおける“忘却”の変貌—無意志的記憶との関連において」(1)、『教養諸学研究』第108号。「プルーストにおける“忘却”の変貌(『スワン家のほうへ』まで—無意志的記憶との関連において)」、『教養諸学研究』第110号。

⁽⁵⁾ *N. a. f.* 17761. フランス国立図書館所蔵。

⁽⁶⁾ 「アルベルチヌ、プルーストの『花咲く乙女たちのかげに』第一部の真の主人公—テーマとしての忘却の創造と既テキストへの導入」、『教養諸学研究』第112号。〈Présentation du thème de l'oubli dans la deuxième partie d'*À l'ombre des jeunes filles en fleurs* chez Marcel Proust〉、『教養諸学研究』第114号。

は13年『スワン』出版時には、構想になかったアルベルチヌを創造したものの、それはゴモラの物語系統に属する側面であろう。14年5月末に秘書兼運転手のアルフレッド・アゴスティネリが飛行機事故で死亡したのち、彼との関係でおのれの内部に忘却を発見して、しだいにそれを理論化してから、それを基に彼女にまた新たな人物像を付与することになる。アルベルチヌはゴモラの女、主人公の嫉妬の結果、囚われの女になり、その桎梏から逃げ去る女になって、死後、忘れ去る女となる。第六卷『消え去ったアルベルチヌ（逃げ去る女）』の「ヴェネチア滞在」章で、話者は忘却の最終である第三段階の境地を開陳し、アルベルチヌへの愛も、ジルベルトの場合と同じように、「結局は忘却の一般原則に帰する」と語るのである⁽⁷⁾。プルーストは、「愛していた私の自我」が死んでしまい、新しい自我にとってかわったため、アルベルチヌを愛していたかつての自我が蘇らず、彼女は「私」にとって完全に無関心な存在になったという忘却の最終段階の心的現象を戦争中、15年頃までにはほぼ理論化していた。少年が少女をプラトニックに愛し、仲違いをして別れて、しだいに少女が忘却の対象になった（しかも時間の短さと経緯の単純さは、アルベルチヌ物語に比して、驚かざるをえない）にすぎない『花咲く乙女』の恋愛関係に、それを無理やりにあてはめたのである。かくして『花咲く乙女』第二部の冒頭で、一部での出来事の二年後、「私」がバルベックに出発する頃は、「私はジルベルトにたいしてほとんど無関心に達していた」⁽⁸⁾と話者は宣言する。この部分は話者が一方的にジルベルトへの忘却をまさに宣言しているだけで、物語上の内実はほとんど示されていない。ジルベルトはバルベック滞在物語での女性登場人物としてもはや想定されていない以上、プルーストは、他の少女の一人と一緒に登場するアルベルチヌと主人公との恋愛物語にはやく移行するために、このマニフェストじみた文章をいわば一件落着といった意味合いをこめて、第二部の冒頭においたのであろう。じじつ主人公の「私」の関心は、

⁽⁷⁾ *AD*, IV, pp.220-224.

⁽⁸⁾ *JF*, II, p.3.

少女たちと出会った以後、彼女たちに完全に移行し、ジルベルトへの言及は稀になり、「私」の意識では不在と化する。主人公はバルベックで少女たちの一団と戯れるうちに、そのなかのひとりアルベルチヌに惹かれてゆく。しかしこの巻の終わりでは、「私」はアルベルチヌをグランドホテルの自室に招きよせるが、接吻をしようとして、彼女に断固拒否されるという“劇的な”場面をもって、二人の関係は閉じる。アルベルチヌとの関係はそこで休止してしまい、話者はアルベルチヌはその後、ほかの少女たちより先にパリに帰ったと報告するにとどまっている。

1920年に出版された『ゲルマンのほう』はIとIIに分かれている。物語の中核は、主人公とコンブレ時代からの憧憬の対象であるゲルマンと公爵夫人をめぐるパリ社交界である。バルデッシュはこの巻の本質を突いている。「もしこの巻で語られた出来事だけをみれば、『ゲルマンのほう』はほとんど材料を含んでいない。それは、話者がある別の時期に選んだ“人生の断面”にすぎない。冒頭には物語の連続性にかんするある解答はあるものの、プルーストはいかなる説明もしない。夏のバルベックから、何年経過したのであるか？バルベックで、話者は何歳であったのか？十八歳？いま彼は何歳なのか？二十歳？、二十二歳？誰も知らない」⁽⁹⁾。奇妙なことに、『ゲルマンのほう I』は作者プルーストによって初版発行当時も章立もされていないのにたいして、『ゲルマンのほう II』は第一章、第二章に分けられているだけでなく、それぞれの章に作者の手になるレジユメさえ掲載されている（第一章：私の祖母の病気—ベルゴットの病気—公爵と病気—祖母の衰弱—その死。第二章：アルベルチヌの訪問—サン＝ルーの友人たちにとっての富裕な結婚の見通し—バルム大公妃をまえにしたゲルマン家の才気—シャルリュス氏への奇妙な訪問—私にはますます彼の性格がわからなくなる—公爵夫人の赤い靴）。なおプルーストの手になるこのレジユメにしても、必ずしも物語内容を忠実に反映し

⁽⁹⁾ Maurice BARDÈCHE, *Marc Proust romancier, II*, Les Sept Couleurs, 1971, p.99.

ているとはいえない。プレイヤー版編者が作成したレジユメの物語の各シーケンスごとにつけた副題を読めば、その差異が明瞭となろう。因みに、章立てでもない『ゲルマント I』は、「名の時代：ゲルマント公爵夫人—パルム大公妃が予約した夜の公演（この部分はラ・ベルマがオペラ座で『フェードル』を演じる場面）—ドンシエール—パリへの帰還—パリにて、サン＝ルーとともに—ヴィルパリジ夫人のサロン—私の祖母の病気」。『ゲルマント II』は、「第一章：私の祖母の病気（ここの部分は「私の祖母の死」としなければおかしい。Iの終わりですすでに祖母は病気であることは記してあるのだから。おそらく編者の誤りであろう）—アルベルチヌの訪問—ド・ステルマリア夫人—友情の夜—ゲルマント家での晩餐—ド・シャルリュス氏は私を狼狽させつづける」⁽¹⁰⁾。プルーストのレジユメは、作者自身が印象づけたい物語内容の核といたったものを強調する形になっているのにたいし、編者は一般的なレジユメの形、すなわち、物語内容を抽象して総称をつけたのである。

なぜこのような不均衡な現象が起きたのであろうか。それは、『ゲルマントのほう』 I と II の成立過程の年代上の相違に所以するのである（CG I と CG II と略称する）。この相違を調べてゆくと、レジユメの有無の問題よりはるか大きな問題を含んでいることがわかる。新プレイヤー版編者の Notice⁽¹¹⁾ をもとに再構成すれば、成立経緯はつぎのようになる。プルーストは1912年夏から1913年春にかけて、『ゲルマント I』にわれわれが今日知るだいたいの物語内容と流れをすでに書上げていた。作者はこの当時はまだ『失われた時』を三巻本にする構想をいっていたため、13年秋の『スワン家のほうへ』出版をまえにして、現行版『花咲く乙女たちのかげに』とこの『ゲルマントのほう I』を『ゲルマントのほう』という表題でまとめた。『スワン』の裏表紙には、"LE CÔTÉ DE GUERMANTES (Chez Mme Swann. — Noms de pays : le nom. — Premiers crayons du baron de Charlus et de Robert de Saint-Loup. — Noms de personnes:

⁽¹⁰⁾ CG, II, pp.1969-1980.

⁽¹¹⁾ Thierry LAGET, in *Notice du Côté de Guermantes I, II*, pp.1504-5.

la duchesse de Guermantes. — Le salon de Mme de Villeparisis).”と次巻が予告されていた。もちろん、これはアルベルチヌが存在しない小説構想である。プルーストはこの『ゲルマンのほう』のタイプ原稿をグラッセ書店に渡し、それをもとにした棒組校正刷（1914年6月6日から11日の印刷所による日付がある）がプルーストに届けられた。今日 Les Placards de Grasset de 1914と呼ばれるものがそれである。ただし印刷所のミスにより、前半部（現行の『花咲く乙女』に相当）と後半部⁽¹²⁾（現行の『ゲルマン I』に相当）は印刷番号が逆になっている。前半部については、われわれは以前、『花咲く乙女』における忘却のテーマにかんして論じてきたが、そこには作者プルーストの手になる加筆修正はほとんど施されていない。それにたいして後半部には、ページの余白に夥しい加筆がなされ、のみならず、余白欄に書き込められないときは、いわゆる「紙細工」と称される他の紙に書かれた加筆も貼られている。30年前にわれわれが取得したコピーでは判読不可能な状態のものも数多くある。物語内容からみれば、後半部（1から28と番号が付されている）は「ヴィルパリジ夫人のサロン」の“章”の主人公の「私」とシャルリュスの奇妙な会話で終わっている。

1914年6月、周知のように、プルーストは5月に飛行機事故で死んだアゴスティネリを喪った悲しみのあまり、この棒組校正刷に修正を加える作業に取りかかれなかった。というより、モンテスキウ宛の書簡によれば、「私は第二巻の校正刷を修正することを放棄しました。かくしてこの巻は延期となります。と申しますのも、自分の書いたものを再読するのも不可能だからです」⁽¹³⁾。そんな作者の境遇をまたもや揺るがしたのは、8月の第一次世界大戦の勃発である。出版者のグラッセ自身や印刷工が動員され、続巻の出版は物理的に不可能となり、その後、アルベルチヌの人物像が大いに膨れ上がり、続巻は19年『花咲く乙女たちのかげに』という題名で出版され、13年構想の後半部は『ゲルマ

⁽¹²⁾ N. a. f. 16760. フランス国立図書館蔵。

⁽¹³⁾ *Correspondance de Marcel PROUST*, tome XIII, Plon, 1985, p.241.

ントのほうⅠ、Ⅱ』という題名で20年に出版された。さきほどの編者ラジェによれば、『ゲルマントⅠ』は1914年のグラッセ棒組校正刷の上にプルーストが1916年になってやっと加筆修正したものを基本的に依拠した。「祖母の病気と死」の章（「病気」はCGⅠの最後に、「死」はCGⅡに分けられている）はグラッセ版棒組校正刷には存在しない物語内容であるが、プルーストは当初はこの挿話を最終巻『見出された時』に予定していた。さらに同じ編者の解説によれば、「祖母の病気と死」について、「プルーストの脳裡には、この章はずっときわめて強い統一性をもっていた。それは『ゲルマントのほう』とは別に書上げられ、タイプ清書されて、『ゲルマント』とは並行して発展していった、小説全体とは区別されたひとつの短編小説に似ている」⁽¹⁴⁾。この章は、社交界に進出する主人公の心理とその社交界に集う貴族やブルジョワジーの真実を描こうとするこの『ゲルマント』のなかで、物語内容と流れの観点からみても特異性はあきらかであったが、やはり成立過程にもその特異性は起因していたわけであった。

「祖母の病気と死」は、われわれの課題である忘却のテーマに深くかかわる。祖母の死から一年たった『ソドムとゴモラ』にある第二回バルベック滞在中、主人公はグランドホテルの自室で靴に手をかけたとき、いままで忘却の淵のなかにとどまっていた祖母が突然、姿をあらわし蘇る。無意志的記憶による心情の間歇である。「私」は祖母の不幸の原因をつくったいままでの利己的な自分自身は（祖母はプルーストのなかでは母親そのものであった）、生きていたときの祖母を潜在的な状態でしか思い出してこなかった。いまやかつて祖母を愛していたときの話者の「昔の自我」も蘇ってきた⁽¹⁵⁾。つまり、アルベルチヌスへの無関心が完全になって、彼女の姿も、かつて彼女を愛していた「昔の自我」も蘇らないヴェネチアでの忘却の最後の段階とはまったく逆の現象がおきたわけである。完全な無関心を特徴とする三段階での忘却を否定する、心情の

⁽¹⁴⁾ T. LAGET, *op. cit.*, p.1517.

⁽¹⁵⁾ *SG, III*, pp.153-55.

ポジティブな形である「心情の间歇」のプレリュードともいべき場面がこの「祖母の死」である。この場面の話者は厳肅な肉親の死に立ち会っているわりには、つねに人間観察者の立場を離れることはなかった。祖母は入れ替わり立ち代わり何人かの医者に診察をうけるが、話者はそのたびに個々の医者の人となりやシニカルにリアリスティックに描いて、まるで関心が祖母の病状より、医者の人間にあるかのような叙述スタイルを用いている。極めつきは、臨終間際の「私」の家に真夜中、ゲルマン公爵が弔問に訪ねてきて、有名なデュラフォワ教授を呼ばなければいけないと進言する。公爵は社交界のマナーをこんなときにも発揮するのである。話者はそれをコミカルな筆致で描いているにとどまり、公爵にたいするモラル上の批難の意味はこめていない。話者は「祖母の病気と死」の章においては、全般的に、語る対象とみごとなまでに距離をとっている。死をとりまく主人公の行動と話者の語りのあいだには距離がある。「心情の间歇」の主人公＝話者、すなわち語る対象にのめりこむ形式とはまったく異なるのだ。

バルデッシュは、「祖母の死」について、この章は「いささかしまりのない、いささか追従すぎる、いささか頭脳だけで考えすぎた巻の冒頭におかれて、みごとなまでに厳肅な響き、別の音調となっている。『スワン家のほうへ』において、プルーストが『スワンの恋』が少年の数々の思い出よりももっと堅固な材料の予告となってほしいと願っていたように、ここでは、社交界の情景があらわすあの軽薄でむなししい“偶像崇拜”の序曲として、苦しみと死が、そしてまた苛酷な真実が顕在してほしいと彼は願ったのである」⁽¹⁶⁾。いささか正直すぎてモラルが勝ちすぎた論評である。プルーストは社交界を冷めたシニカルな眼で描いてはいるが、同時に歯が浮いたような会話を叙述することを楽しんでいる面もある。「祖母の死」の場面も、主人公の母親、つまり祖母の実際の娘と祖母がかかわる箇所は真摯な愛情が溢れ、感動させるものがあるが、物

⁽¹⁶⁾ M.BARDÈCHE, *op. cit.*, II, p.96.

語内容からいえば本来副次的なそのほかの（とりわけ医者に関わる）エピソードは、主題を離れ、プルースト独特の一般論展開をはじめ、独立したディスクールの趣さえ感じられる。成立経緯からいえば、当初『見出された時』を予定していたからには、なにもこの『ゲルマントⅡ』の冒頭におかれる必然性はない。おそらく、「心情の間歇」を第二回バルベック滞在時に移行させたことから生じる物語構成上の必然性から、プルーストは前巻のこの箇所においたのであろう。また小説上の祖母の死と、プルーストの母の死の比較関連づける考えがある。プレイヤード版の編者もこの考えにたっている。「なによりもまず、プルースト自身の母親の死こそが、作家にとってのモデルになっている。それに話者の祖母の終焉と1905年9月26日のプルースト夫人のそれとのあいだには、類似性が数多くある。二つの場合、尿毒症の発作は命取りであり、死は死者に新たな若返りをあたえた。このエピソードの草稿に依拠すれば、実話とフィクションのあいだに数多くの近似性を示すことができよう」⁽¹⁷⁾。むしろ、プルースト夫人も小説上の祖母も尿毒症で死んだから、作家は母親を実際に襲ったこの病気がもたらす症状、臨終間際の実際の措置等を利用して、小説に採り入れたであろう。しかし決定稿の話者の語りの方と口調は、単なるモデル問題を陵駕するほど、最愛の肉親と設定されたあるひとりの登場人物をめぐる、女中フランソワーズはじめ数数の医者、ゲルマント公爵などほかの人物の逸話も詳細にわたり物語るにふさわしい冷静さを保持し続けていた。ペインター以後、大部のプルーストの伝記を著したロジェ・デュシェーヌは、先に伝記を書いたディースバックなどにとって、実母の死が『『失われた時』のなかで最も美しい文章に着想をあたえた。プルーストは実母の死を話者の祖母の死に置き換えるだけでよかった。そこにみられるすべては真実である、という。まったく逆である。そのすべてが、ほとんどが誤りである。[...] その死の場面では、マルセルはその母の死を物語っていない。それはあまりにも深刻すぎ

⁽¹⁷⁾ Thierry LAGET et Brian ROGERS, in *Notice du Du Côté de Guermantes II*, p.1673.

てコミック性に耐えられないからだ。彼は彼自身を快復させる、治療できる術をしらなかつた医学と医者に戻しをしたのである」⁽¹⁸⁾ という。単純な置換え説はあまりにも素朴な議論であり、考えとして採用できない。プルーストを知れば、この作家が日ごろから、医者である父や弟への反撥が無意識にもあったことは容易に察しうるであろうし、少年の頃から喘息を患い、生涯とりついでやまない病気に心底悩まされ、それを治せない医学・医者に皮肉な見方をしてた事実は首肯できる。しかしそうした作家自身の個人的な思いでこの「祖母の病気と死」を説明するにはいささか無理がある。やはり、プルーストはこの章を母の死を悼む息子としてではなく、なによりもまずひとりの小説家として書いたという観点から出発しなければならないであろう。

「祖母の死」につづく、アルベルチヌスが不意に話者の家を訪問するエピソードは、もちろん、13年の小説構想には存在せず、続巻の出版が不可能になった14年の大戦勃発以降に書かれたものである。決定稿の『ゲルマン I』の最終部において、祖母がシャンゼリゼ公園で発作に襲われて、祖母の病気が物語の重要なテーマになり、『ゲルマン II』の冒頭にそれが引継がれ、死という結論をもって「祖母の物語」は閉じられる。そのあと“偶然”にも、主人公の両親がバリの家を留守にしてコンプレーに出かけざるをえない状況が設定されて（むろん、プルーストは物語上のリアリズムに注意を払い、わざとらしい理由を話者に語らせる。当時、上流ブルジョワ社会で親が在宅のとき、若い娘が息子を不意に訪ねてきて、息子の部屋に入り、ベッドで愛撫を交わすなどはあまり考えられず、ひとつの事件になろう）、つまり舞台がきちんと整備されてから、アルベルチヌスが久しぶりに物語に登場する。『失われた時』のなかで描かれる祖母は、多くの場合、プルースト自身の母親がモデルとなっているが、その視点でみると、祖母=実際の母が死んでから始めて、主人公の「私」は自宅にアルベルチヌスを引き入れることができたといえよう。

⁽¹⁸⁾ Roger DUCHÈNE, *L'impossible Marcel Proust*, Robert Laffont, 1994, pp.517-8.
Voir, Ghislain DE DIESBACH, *Proust*, Perrin, 1991, p.358.

ではバルベックで主人公を失望させたアルベルチヌがパリにある主人公の自宅を訪問するこのエピソードは、プーレストはいかにして考えついたのであろうか。また訪問をどのようにとらえたらいいのであろうか。草稿研究の嚆矢というべきバルデッシュは、直接的な答えはだしていないが、それに関連してむしろもっと興味深い問題点を示唆している。“フリドラン”とよばれる草稿帖 (Cahier46) には、1915年に書かれたプーレストの現行の『花咲く乙女』以降の小説プランが記載されている。«3^e volume. 1er chapitre : Douleur de la mort de ma grand-mère — Les filles — Désir de vivre avec Albertine. Elle vient sonner quand je ne pense plus à elle. — 2^e chapitre — Retour à Paris. Soirée chez Mme de Villeparisis. Mme de Guermantes». このプランは現行の『ゲルマントⅡ』に相当するのではなく、第二回バルベック滞在がある『ソドム』の冒頭部分 (第二章以降) に相当する。この物語の配置プランを検討して了解されるのは、「プーレストは『ソドムとゴモラ』の内容がどのようなものになるのか知らないし、『ゲルマントⅡ』の内容もまだ最終的には固定していなかったことである」。しかし彼は同じように、「いまや自分の頭のなかでは鮮明になったエピソードの先頭に、“祖母の死の悲しみ”と“アルベルチヌの訪問”がきても、それらをどこに置くべきかわからなかった」のである⁽¹⁹⁾。ここで了解すべきは、意識的であろうと、無意識的であろうと、作者プーレストにとって、「祖母の死—アルベルチヌの訪問」は連続性をもつべき性質のエピソードであったということである。物語の流れから考えれば、あるいは物語の一貫性からみても、「祖母の死」も「アルベルチヌの訪問」も『ゲルマントⅡ』の冒頭で叙述される必然性はまったくない。だからここでは、プーレストの構想では比較的以前から固定していた「祖母の死—アルベルチヌの訪問」という組合せに焦点をあわせ、作者プーレストの内部では、きっとこの組合せにある種の必然性があったとみなしたほうがいいただろう。つまり、愛する肉親の死を終えなければ、恋

⁽¹⁹⁾ M. BARDÈCHE, *op. cit.*, II, p.93.

人との愉悦を味わうことができない、抑圧していたモラル上の禁止が解放されてはじめて、他者との愛が可能になるといった無意識の動機が透けてみえるのである（もちろん、小説のなかで、主人公がアルベルチヌとの愛撫の歓びを真に味わったかどうか、この際、問題ではない）。

バルデッシュは、『花咲く乙女』の章と「アルベルチヌの訪問」の章の最初の稿をブルーストは「1915年2月か3月ごろに書上げ、時期ははっきりと特定できないが、1915年3月から1916年5月のあいだに、『ゲルマンⅡ』の“モンタージュ”がおこなわれた」⁽²⁰⁾とみなしている。映画の手法よろしく、ブルーストはいくつものシークエンスを物語の流れのなかでどこにおくべきかを考慮せずにまずは書上げ、のちに物語の枠組に挿入する。これはブルーストにあっては常套手段みたいなもので、驚くには値しない。だからブルースト的世界は、ジョルジュ・プーレの見方によれば、「断章からなる世界であり、その世界の断章はほかのいくつもの世界をふくんでおり、これらの世界も今度は断章からなっている」⁽²¹⁾といえるほど、一見、首尾一貫性を欠いた断章ないしはシークエンスで充ちている。それらを首尾一貫して繋いでいるのは、話者の内的精神である。このモンタージュ手法のおかげで、『見出された時』用に書いた「祖母の病氣と死」は、結局は「アルベルチヌの訪問」と組み合わせられたのである。ブルーストはそれらを『ゲルマンⅡ』の冒頭に位置づけた。同じくモンタージュ手法といえば、すぐに想起するのは「心情の間歇」のシークエンスである。これは仮説にすぎないが、ブルーストにとって小説中間部で最重要エピソードであるのは、『ソドム』で展開されるこの「心情の間歇」であろう。すなわち、祖母＝母の蘇り、また「私」のかつての自我の蘇り物語である。周知のように、「心情の間歇」は草稿の段階では、当初はイタリア滞在中におきた心的現象として想定され、場所も、ミラノのホテルであったり、パドヴァの汽車のなかであったり、あるいはヴェネチアでさえあった。それが『ソドム』

⁽²⁰⁾ Ibid., p.75.

⁽²¹⁾ Georges POULET, *L'espace proustien*, Gallimard, 1963, p.54.

における第二回バルベック滞在時のグランドホテルの主人公の自室に設定されてから、はじめてこの一連の物語断章となった「祖母の死—アルベルチヌの訪問」の物語内の場所がきまったのではないであろうか。この拙稿の後に大いに考察すべき課題である。ともあれ、『ゲルマントⅡ』はかくして現在のようにモンタージュされた。『ゲルマントⅠ』は先にのべたように13年にはおおかた書上げられていた。その意味で第三巻『ゲルマントのほう』は著しく「混成的な性格」⁽²²⁾をもち、不均衡な成立事情があった特異な性質をもつ。ではわれわれのテーマである「忘却」はどのように叙述されているであろうか。

第二巻の『花咲く乙女』第一部では、話者の内部でジルベルトにたいして忘却がしだいに生じはじめ、ついにはその忘却がほぼ完成しつつあった。われわれの見方からすれば、この段階での忘却は、ブルーストが第六巻の『消え去ったアルベルチヌ』で開陳されるアルベルチヌを対象とした忘却理論を無理やりにジルベルトに適用した心的現象である。つまり、既存のジルベルトとの少年少女のたわいもない恋愛物語（12年のタイプ原稿の段階）を、アルベルチヌ創造（14年以降）にともない、あたかも人格形成がある程度なされた青年の内的心理でおこりうるであろう恋愛物語（仲違い—別離—忘却）に仕立て上げたのである。しかも（ブルーストはあまり時間を明示しないけれど）半年間の出来事という、人間の心理過程からすれば、かなり異常としかおもわれない物理的時間内のことであつた。だからこそブルーストは、バルベックに出発する第二部の冒頭で二年という経過をおき、この時点では、ジルベルトにたいする忘却はほぼ完成したと話者に宣言させたのであろう。主人公は避暑地で若き乙女たちに出会い、彼女たち、とりわけそのなかのアルベルチヌに心惹かれる。ジルベルトへの思いは記憶から遠ざかるのは当然であつた。であるとすれば、時間の経過がはるかに顕著であり、主人公自身が少年から青年に移行した第三巻『ゲルマントのほう』では、ジルベルトは「私」の内部でより一層忘

⁽²²⁾ M. BARDÈCHE, *op. cit.*, II, p.100.

却の彼方の存在であるはずである。つまり、アルベルチーナに恋愛の対象が移行したあと、社交界が主要テーマであるこの巻には、ジルベルトとの恋愛の葛藤はむしろ存在せず、彼女とかわる忘却もテーマとなることはないはずである。

そこで、ジルベルトの名が登場する箇所をしらべてみると、『ゲルマン I』では九箇所、『ゲルマン II』では二箇所であった。アルベルチーナが物語にいわば再登場する『ゲルマン II』は別として、前半の『ゲルマン I』では、ジルベルトはもはや本来、主人公の恋愛対象ではないはずなのに、九箇所もあるのは、物語の流れからすれば奇妙な現象である。さらに奇妙なのは、『ゲルマン I』では、アルベルチーナの名が一箇所しか登場しないことである。この前半部では、『花咲く乙女』の終わりで主人公がアルベルチーナに接吻を拒否された（そうとう時間が経過したという設定になっているが）心理の後遺症もないし、彼女への未練も一切語られない。アルベルチーナは数人いる少女たちから、主人公の「私」が選んだ女である。ジルベルトとの場合と愛の様相は異なるであろうが、彼女への愛は、ジルベルトの場合と同じように忘却の彼方に沈んでしまったのであろうか。もちろん、この巻はゲルマン公爵夫人への主人公の憧憬もしくは愛が主たるテーマであるから、アルベルチーナへの関心は希薄であるとみなすのは当然であるが、そうだとしても名前が一回しか登場せず（しかもジゼルやジルベルトと並置されたコンテキストで）、そのかわりに忘れられた存在であるべきジルベルトの名が九回も登場するのは、主人公の心的一貫性あるいは連続性からみれば、奇異なこと甚だしいものがあるといえよう。では、こうした問題を考察するために、話者はジルベルトの名をどのように表現されているか、物語の流れと内容の観点から詳細に検討してゆこう。

『ゲルマン I』

(1) «Je pensais tout à l'heure que, si je n'avais pas eu de plaisir la première fois que j'avais entendu la Berma, c'est que, comme jadis quand je retrouvais Gilberte aux

Champs-Élysées, je venais à elle avec un trop grand désir.» (CG, II, p.349)

(2) «Et la différence qu'il y a entre une personne, une œuvre fortement individuelle et l'idée de beauté, existe aussi grande entre ce qu'elles nous font ressentir et les idées d'amour, d'admiration. Aussi ne les reconnaît-on pas. Je n'avais pas eu de plaisir à entendre la Berma (pas plus que je n'en avais à voir Gilberte).» (CG, II, p.350)

主人公がオペラ座でラ・ベルマ演じる『フェードル』を聞いたあと、この女優の演劇的な天才といわれる意味について論じる箇所である。いずれもラ・ベルマを聞いても喜びを感じなかった理由を、ブルースト特有の比較文のなかで、話者とジルベルトとの恋愛関係を引き合いに出して論じている。たとえばつての思い出のなかにあるジルベルトとの場面といえども、前巻の冒頭で彼女への無関心がほぼ完全な状態になったと宣言した割には、アルベルチヌに関心が移ってから語られることがなかった割には、なぜここでその名を引き合いに出すのであろうか。“un trop grand désir”と“les idées d'amour, d'adoration”という表現はラ・ベルマにたいしてつかわれているが、比較対象のジルベルトにもあてはまる。そうであれば、逆に話者は、彼女への関心を失っていないのではないかと推察しうる文章である。じつはブルーストは、これらの箇所で以前指摘した⁽²³⁾のと同様な、ある意味では安易な手法をとったのである。すなわち、13年のタイプ原稿に依拠したLes placards de Grasset de 1914⁽²⁴⁾の文章をそのままそっくり移行させただけなのである。アルベルチヌ創造以前の文章だから、ジルベルトにたいする忘却などありえない時期の物語内容を反映したもののなのだ。

(3) «Même je ne tenais pas à venir un autre jour réentendre la Berma ; j'étais satisfait d'elle ; c'est quand j'admirais trop pour ne pas être déçu par l'objet de mon admiration que cet objet fût Gilberte ou la Berma, que je demandais d'avance à l'impression

⁽²³⁾ 拙稿、「Présentation du thème de l'oubli dans la deuxième partie d'*À l'ombre des jeunes filles en fleurs* chez Marcel Proust», 『教養諸学研究』第114号。

⁽²⁴⁾ (1) は *N. a. f.* 16760, pl.5, vii. (2) は pl.5, viii.

du lendemain le plaisir que m' avait refusé l' impression de la veille.» (CG, II, p.352)

残念ながら、筆者が所有する30年以上前のグラッセ棒組校正刷のコピーには、まさにこの部分が掲載されているであろうページがどういうわけか欠落している（コピーの裏にフランス国立図書館のservice de photocopieの係員が作成した通し番号のうち15番が欠落している）。この文章がのちに挿入されたかどうか判然としないが、『失われた時を求めて』のタイプ原稿・清書原稿・校正刷にプールの加筆した（『花咲く乙女』以降の）全箇所を研究したアリソン・ウイントンの著書⁽²⁵⁾には、この箇所がのちに加筆されたものだとの記述がないから、(1)、(2)の「ラ・ベルマー・ジルベルト」の組合せから類推すると、グラッセ版に存在した可能性がたかい。ここでは前の二箇所以上に、ジルベルトがラ・ベルマとならんで物語内容の現在における話者の”objet d'admiration”になっている。「私」の無関心になった対象とは、この文章からはどうても想定できない。また因みに、ウイントンの調べたところによると、(1)、(2)の文は、13年のタイプ原稿にプールの手書き加筆した部分の一部だとのことである。やはり、14年の同じグラッセ棒組校正刷でも、『花咲く乙女』に相当する部分は、12年のタイプ原稿に依拠しているのにたいし、この『ゲルマン I』は12年と13年のタイプ原稿に依拠しているから、プールはその間に、のちに『花咲く乙女』で繰りひろげられる主人公とジルベルトとの恋愛関係のある程度確立していたのであろう。

(4) «[...]des idées romanesques que je possédais depuis longtemps et que la froideur d'Albertine, le départ prématuré de Gisèle et, avant cela, la séparation voulue et trop prolongée d'avec Gilberte avaient libérées (l'idée par exemple d'être aimé d'une femme, d'avoir une vie commune avec elle).» (CG, II, p.359)

主人公のゲルマン公爵夫人にたいする愛と信じている憧れを、オペラ座から帰って反芻する場面である。夫人のイメージがもたらした甘美なる感覚を、

⁽²⁵⁾ Alison WINSTON, *Proust's additions*, II, Cambridge U. P., 1977, p.61.

「以前から自分が所有していたロマネスクの観念のとなりにうかべる」。このロマネスクな観念は、話者には、それとは裏腹な「ジゼルの早すぎた出発、アルベルチヌの冷たさ、ジルベルトとの自ら望んだものとはいえ、長くなりすぎた別離」と対比すべきものである。当然話者にとって、この文の主眼はゲルマント公爵夫人にあり、おのれの従来のロマネスクの観念から彼女を甘美に思い描く点を強調したいゆえに、話者にとりロマネスクとはいえない、否定的に捉える三人の娘の行動・性質・出来事を喚起しただけの文である。紛うかたなき、アルベルチヌ創造後の文章だ。『ゲルマントのかた I』でアルベルチヌが登場するのはここだけである。それも、ジルベルトはともかく、ジゼルと並置された形である。主人公ではないのはもちろん、脇役のなかで“その他のひとり”として位置づけられている。物語の流れ、内容からいえば、奇妙といわざるをえない。興味深いことに、この文章を中心とした部分は14年グラッセ版のページの左側の余白に一度加筆⁽²⁶⁾され、それが横線を引かれてのち、その箇所に“紙細工”が貼られて、改めてその上加筆されていた。

(5) «Ce n'est pas dans le firmament seul que je mettais la pensée de Mme de Guermantes. Un souffle d'air un peu doux qui passait semblait m'apporter un message d'elle, comme jadis de Gilberte, dans les blés de Méséglise.» (CG, II, p.418)

これもグラッセ版に存在する文章である⁽²⁷⁾。主人公がドンシエールにサン＝ルーを訪ねてしばらく滞在する章で、サン＝ルーの叔母であるゲルマント公爵夫人への思いが息苦しくなるほど恋しいといささか感傷的につづった文章のなかで、相変わらずジルベルトは脇役で比較の対象になっただけである。

(6) «Sans doute, de ce que je croyais reconnaître des tristesses que j'avais éprouvées à propos de Gilberte [...]» (CG, II, p.418)

前文からほぼ直後につづく文。これもゲルマント夫人を思い苦しむというコンテクストのなかのもので、ジルベルトは比較として引用されたにすぎず、同

⁽²⁶⁾ N. a. f. 16760, pl.7, iii.

⁽²⁷⁾ N. a. f. 16760, pl.12, iv.

様にグラッセ版に存在する⁽²⁸⁾。これら (5) (6) のジルベルトは第一巻の『スワン』に登場する人物像の回想であり、(5) はコンプレー時代の夢想、(6) はシャンゼリゼ公園でジルベルトに元旦は会えないと告げられたときの悲しみを思い出したものである。どちらも『花咲く乙女』の“仲違い—別離—忘却”を経た人物のイメージをいささかも内包していない。

(7) «Nous quittâmes le théâtre, Saint-Loup et moi, et marchâmes d'abord un peu. Je m'étais attardé un instant à un angle de l'avenue Gabriel d'où je voyais souvent jadis arriver Gilberte. J'essayai pendant quelques secondes de me rappeler ces impressions lointaines.» (CG, II, p.480)

この文章のなかで、話者が回想するのはまちがいになくジルベルトである。かつてジルベルトがやってくるのをよく見た、シャンゼリゼ公園をかこむ大通りをとおりかかったとき、話者は「数秒間、遠い昔の印象を思い出そうとつとめた」。ここでは話者の彼女にたいする無関心が如実に感じられる。むろんグラッセ版にはない後に書かれた文章である。ウイントンによれば、1919年8月の日付があるガリマール版棒組校正刷の余白に加筆されたものだという⁽²⁹⁾。プルーストはグラッセ版校正刷に加筆しはじめた1916年以降も、このガリマール版校正刷に加筆する1919年8月以降の時期まで、ジルベルトが話者にとって忘却の存在であることはあまり意識してこなかったのであろう。ここでは物語の流れからすれば、その名が登場するなんの必然性のないこの箇所、あたかも急に思いついたといった調子で物語の流れの辻褄を合わせたという印象をあたえる。

(8) «J'en [stupéfaction] éprouvai une plus grande encore à savoir que mon émoi de ce jour ancien où j'avais parlé de Mme Swann et de Gilberte était connu par la princesse de Guermantes.» (CG, I, p.568)

(9) «Il y a quelques années j'aurais été bien heureux de dire à Mme Swann “à quel

⁽²⁸⁾ N. a. f. 16760, pl.12, v.

⁽²⁹⁾ A. WINSTON, *op. cit.*, II, p.69.

sujet” j’aurais été si tendre pour M. de Norpois, puisque ce “sujet” était le désir de la connaître. Mais je ne le ressentais plus, je n’aimais plus Gilberte.» (CG, I, p.569)

いずれの文も、主人公がスワン夫人とヴィルパリジ夫人のサロンで出会う場面。スワン夫人は、ノルポワ氏がゲルマント大公夫人邸の晩餐の席、みなのみ前で話者のことを、「なかばヒステリーのおべっか遣い」、と言ったとばらす話のあとにつづく文である。(9) にははっきりと「私はもはやジルベルトを愛していなかった」と断言されている。このような文章があれば、この引用文は14年のグラッセ校正刷には存在せず、後年のものだとすぐにも判断できる。グラッセ版には、スワン夫人はヴィルパリジ夫人のサロンには登場しない。オデット・スワンの社会的昇級の意味合いもあって加筆挿入されたものであろう。ゲルマント公爵夫人はスワン夫人がこのサロンに入ってくるのをみると(p.560)⁽³⁰⁾、彼女に会いたくないし、紹介されるの拒否するので別れも言わずに立ち去ってしまう。じつはスワン夫人がこのサロンに登場する場面から引用した文もふくめて、すべてが14年のグラッセ版の上に加筆されたり、別紙で貼られて加筆挿入されたものである。そのなかでジルベルトの名が副次的な、いわば“ついでに”出てくるだけである。話者の焦点はあくまでオデット・スワン夫人に合わせられている。ともあれブルーストが、『ゲルマント I』の終わり部分、「祖母の病気」の章の直前では、話者にとってジルベルトが無関心な存在でしかないことを鮮明にしめたことはたしかである。

さて、われわれが本稿を「忘却の不在」と題したのは、本来物語の流れからすれば、『ゲルマント I』では、話者のジルベルトへの無関心がほぼ完成し、彼女は「私」にとり忘却の彼方に過ぎ去った存在でしかなかった先行する『花咲く乙女』をうけて、ジルベルトにたいする関心はまったく顕在化するべくもないという意味ではない。1914年の夏以降、ブルーストのなかでアルベルチヌ像が本格的に創造しはじめられた。とりわけ忘却のテーマにかんする

⁽³⁰⁾ N. a. f. 16760, pl.26, v.

死後のアルベルチヌ像は、14年10月に親友アーン宛の書簡のなかで語られるように⁽³¹⁾、カブールに滞在中、愛人アゴスティネリへの自分の気持の動きを観察しているうちに着想を得たのである。以後、作家はアルベルチヌを小説の中間部をしめる主要な女性登場人物へと創造を加速化させることになる。この“忘却の発見”は13年『スワン』出版時に予定されていた続巻の物語構想に多大なる影響をおよぼさずにはおかなかった。14年6月に印刷された、アルベルチヌが登場しないグラスセ棒組校正刷はこの古い構想を反映したものである。アルベルチヌ創造はこの校正刷の物語内容に逆照射されて、プルーストは、校正刷の段階での主人公とジルベルトの少年と少女の淡い恋愛関係を活性化し、決定稿の『花咲く乙女』では本格的な恋愛物語（仲違い—別離—忘却）へと変貌させた。この続巻『ゲルマン I』もジルベルトにかんしては、前巻の物語内容の延長でしかるべきはずだし、大方の部分は14年に印刷されたグラスセ棒組校正刷に基づいているといえども、話者はジルベルトに無関心になっているはずである。しかるに引用した(1)、(2)、(3)、(5)、(6)の文は、校正刷の文をそのまま引継いで、そこに描かれたジルベルト像は「私」にとって無関心な存在とはなっていない。だから、本来あるべきである物語上の位置に、忘却のイメージを内包しないジルベルトが登場するという意味で、「忘却の不在」と名づけたのである。むしろ一方、あきらかにとってつけたように、物語の流れのなかの必然性のない箇所、プルーストは無関心・忘却の対象であるジルベルト像をいくつか加筆という形で挿入している。以上を勘案すれば、『ゲルマンのほうは』プルーストのエクリチュールの作業場でつくられた作品の「混成性」を示唆する恰好の例といえよう。

（本稿は平成16年度科研費補助金—基盤研究（C）課題番号16520109—による成果の一部である）

⁽³¹⁾ Marcel PROUST, *Correspondance de Marcel Proust, tome XIV*, Plon, 1986, pp.357-61.